

きょういく

きょういく アイ



— Information for Boards of Education —


KAIKYUDO
2006 vol.1-01

巻頭言

心をつくる、いのちをつくる食育

フードプロデューサー／「食輝塾」主宰 小倉朋子

様々な視点から「食育」の取り組みがなされています。食を見つめる仕事していると、食育が必至の状況であることはつぶさに感じるのですが、今も「食育って一体何？」との質問を受けることも多く、学校や家庭で模索している現状も見えます。

体験や知識をつけることが食育の「目的」になっていることが多いのではないのでしょうか。しかしそれはあくまでも導入であり、心に響きを作ることが食育を推進する鍵と感じています。簡便な食生活が容易な現代では、体験や知識習得をしても、心が動かないと実際の生活に生かせないのですね。

大きなことをしなくても、「思いやり」の言葉をかける食環境作りなどの、学校や家庭での日常の些細な働きかけで子供の気持ちは安らぎます。例えば、料理をして失敗した際「一生懸命作ったんだから美味しいね、全部食べよう」の一言を加えるだけで、食の大切のみ



ならず「失敗もある、でも頑張る過程は楽しい」といった事も気づきます。先日箸づかいの本を出版したのですが、愛情深く伝えますと、箸を持てるようになるだけでも、性格が前向きになったり、早起きになり健康に気遣うなど、驚くほど広範囲に心への影響が見えるのです。

自分を生かしてくれる唯一の存在である「食」に愛情を持つこと、それが自分を大事に感じることや周囲への愛情、社会の中で人生を大切に捉えることにも繋がるのだと感じています。指導の場に愛情が存在するかどうか、が唯一の食育の必須項目だと考えます。

食卓は教育現場としては最高ですし、「食」こそが、全ての「心」の教育の教科書に成りえるのではないのでしょうか。それこそが、食育の目指してはいないかと考えています。

●おぐら ともこ●

企業、飲食店、行政のフードコンサル、事業提案、メニュー開発などの他、食事マナーと食文化を中心の総合教室「食輝塾」を主宰。食育講演、動向分析など多角的に、新聞、雑誌に多数連載。農水省「食育推進ネットワーク幹事」。亜細亜大学・戸板女子短大非常勤講師 著書「箸づかいに自信がつく本」

目次

心をつくる、いのちをつくる食育 小倉朋子	1
学習スタイルの大転換をしよう 明石要一	2,3
基礎的学力のおちこぼし	4

学習スタイルの大転換をしよう

明石要一 (千葉大学 教育学部長)



1 二つの学力観の両立

学力の低下が叫ばれている。東京都の小学五年生の学力は二十年前に比べて低下した、という報告がある。また、この学力の低下とともに学力の両極分化が進んでいるという。しかも困ったことに、この学力の両極分化が家庭の経済力や文化的なインフラと一致し始めていることである。

経済的なゆとりのある家庭の子どもは自然体験や知的な刺激が多く学力を高めるチャンスが多い。一方、経済的にゆとりのない家庭の子どもは行動半径が狭く体験と刺激が乏しく、学力をつけるチャンスが少ない。

この二十数年間、子どもの学力の差は家庭の経済的、文化的な違いに影響を受け始めている。それでは学校は子どもの学力をどのように保障していけばよいのだろうか。この問いに対して、私は子どもの学習スタイルの大転換を提案する。

幸いに文部科学省の中央教育審議会の教育課程部会が学力について二つの考え方を示している。一つは習得型の学力観である。基礎・基本的な知識の獲得と育成に力を入れる。もう一つは探求型学力観である。自ら学び自ら考える力の育成である。

大切なのはこの二つの学力観を対立的、あるいは二者択一的に捉えるのではなく、両立させて車の両輪にさせることである。

2 コツコツ型からポイント学習へ

二つの学力を身につけた子どもの育成はどうすればよいか。それに答えねば絵に描いたもちになる。子どもたちの学習スタイルは大きく分けて次の四つがある。

① **コツコツタイプ**…ノートを整理し、単語帳や年表などを作りながらコツコツ勉強するタイプ。

② **一夜漬けタイプ**…試験の前夜になるとあわてて教科書やノートを開き、半徹夜に近い状態で勉強するタイプ。

③ **ポイント学習タイプ**…テストに出そうな問題を予想したり、過去問題を解いたりして大切なところを絞るポイント学習タイプ。山はり学習ともいう。

④ **「勉強だけが人生ではない」といってとりたてて勉強しないタイプ**。

今の中学生の学習スタイルを調べると、驚くことに一番多いのが④の勉強しない者たちである。実に四割を越えている。

次に多いのが②の「一夜漬け」のタイプで、四人に一人いる。三番目が①のまじめなコツコツタイプである。20%足らずである。一番少ないのが③の授業に集中するポイント学習をするタイプである。一割程度である。

比較するデータがないが二十年ほど前までは努力する者が半数近くいたのではなかろうか。それが今は「勉強だけが人生ではない」といって勉強しない者が増えている。

これでは困る。基礎・基本の知識の獲得が不足する。そこでまず「継続は力」を信条とする子どもを育てる。例えば、鉛筆の持ち方をきちんと教える。筆圧を強くさせる。ノートの写し方を教える。次に、俳句や詩、短歌を音読させ暗記させる。日記をつけさせる。計算や漢字ドリルを続けさせる。

学習習慣を身につけさせ、学習技能を育てる。こうした学習技能と学習習慣の育成は小学校で責任を持って行う。

中・高校では授業に集中し何が大切で何がいらな

いか、という判断ができる生徒の育成である。

これが山をはるポイント学習タイプである。彼らは授業の全体が見え取捨選択ができる。ノートは写さないで、取るようになる。授業が終わった後も職員室まで行き教師に質問をするし、自分で学習問題を作ることができる。

コツコツタイプは基礎学力をつけるには適した学習方法であるが、ややもすれば勉強したという自己満足に陥る危険性がある。

山をはるポイント学習は外れると痛手を負い、当たると収穫がある。まさにハイリスク、ハイリターンである。自己責任が身につく。

この学習方法が探求型である。これは一人では難しい。そこで中学生に三人ぐらいの学習集団をつく

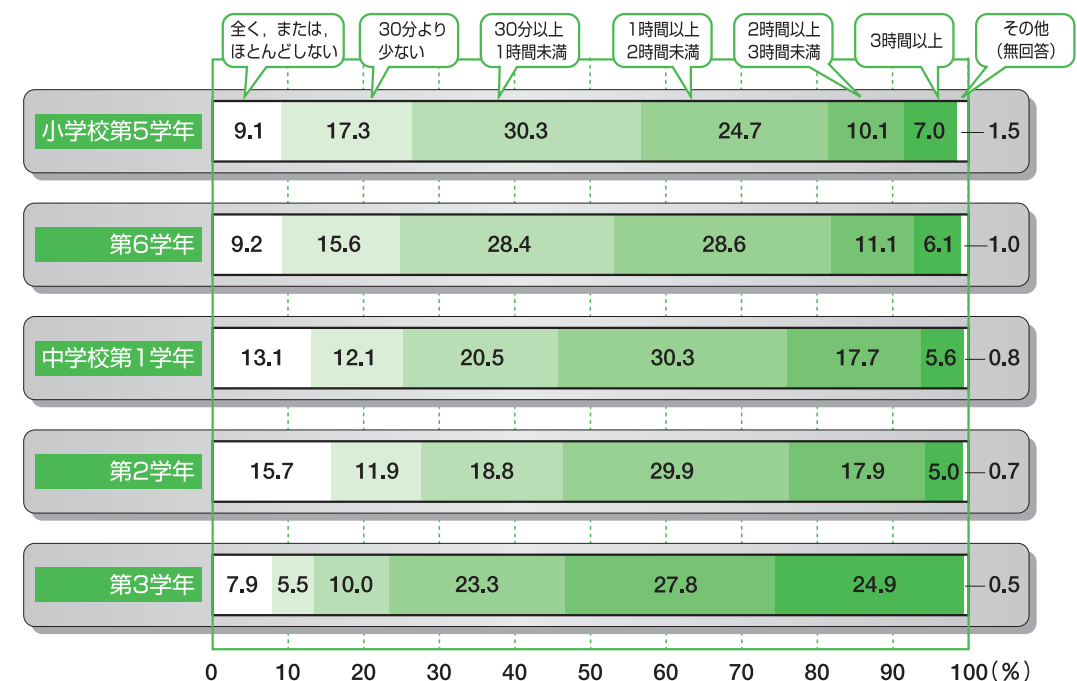
ってもらい、試験の一週間前からお互いにテスト問題を当てる練習をする。

この学習過程が大事である。お互いの予想問題が異なる。そこから議論が生まれる。そして試験後にお互いの問題的中率を確かめ合う。疑問がわき質問ができるようになると、この探求型の学習の力がついたと判断する。

日本全体がコツコツタイプを奨励してきた。それが現在崩壊しつつある。今一度コツコツタイプの育成が求められる。

しかしそれだけではいけない。全体を見据えて何が必要で何が不必要か、判断できる探求型の子どもの育成が大切である。そのためには質問力が身につくポイント学習への大転換が不可欠である。

児童生徒の一日の勉強時間 (平成15年度)



(資料) 国立教育政策研究所「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」

基礎的学力のおちこぼし

学習には、その前提条件として一定の能力がなくてはならないという考え方があり、たとえやる気次第であるといながらも、他方では能力のレベルを問題にすることが多い。そして、意欲不足が原因であれば、なんとか指導法を工夫することによって不適応から回復させることができるが、能力不足が原因であればほとんど絶望的であると考えられやすい。

果たして、一般に考えられているほどに、能力不足が学習不適応の原因になっているのであろうか。この点について吟味し、正しい能力観を確立することが大切であり、不適応児指導の出発点ともなるであろう。

ひと口に「能力」といっても、この言葉にどのような意味を与えているかはさまざまである。知能のような、潜在的な能力を考えていることもあれば、知識・技能のように獲得された能力が想定されていることもある。しかし、学習不適応の原因としての能力を問題にする場合には、獲得可能な能力が十分に身についているかどうかを調べるべきである。というのは、その能力が不足しているならば、指導によって獲得させるべきであり、学習への適応を図るための対応策を立てるのに、能力診断が役立つからである。

そこで、学業不振児などを対象にして治療教育を始

めようというときには、まず基礎的な学力に欠けるところがないかどうかを綿密に調べる必要がある。たとえば、小学校6年生の不振児の場合、5年生、4年生、3年生というように、順に溯って、下学年の学習内容におちこぼしがないかどうかを調べてみるのである。その際、基礎的な内容として、国語や算数の知識・技能を中心に習得状況をチェックすべきである。

基礎的な内容を再学習することによって、学習不適応から脱却できる子どもがかなりの比率を占めるのではないと思われるが、このことは、不足しているとみられる能力として基礎的な学力が注目されなければならないことを意味する。そして、その基礎的な学力は、再学習によって補充することができるのであるから、「能力不足」を学習不適応の決定的な原因であるとはいえないことになろう。

子どもが理解できるところまで逆戻りして指導するという対応策をとることが可能であれば、基礎的な学力の中身も明らかになり、学習不適応の原因も特定され、不適応からの脱却にも道が開かれることを忘れてはならない。

開隆堂出版刊「子どもをとりまく問題と教育-⑬-学習不適応の心理と指導-北尾倫彦 編著」より抜粋

開隆堂 / 図書紹介

子どもをとりまく問題と教育 全18巻

A5判 / 各巻定価2,415円 (2,300円)

問題解決のヒントがきっと見つかります。

- 第1巻 子どもをとりまく生活環境
- 第2巻 子どもの発達課題と教育
- 第3巻 親・教師・友人と子どもの関係
- 第4巻 問題行動の見方・考え方
- 第5巻 心の病
- 第6巻 いじめ
- 第7巻 不登校
- 第8巻 校内暴力
- 第9巻 家庭内暴力

- 第10巻 性的問題行動
- 第11巻 自殺
- 第12巻 青春期の薬物乱用
- 第13巻 学習不適応の心理と指導
- 第14巻 学級崩壊と逸脱行動
- 第15巻 教育相談による理解と対応
- 第16巻 生徒指導のあり方
- 第17巻 保健室における養護教諭の対応
- 第18巻 問題行動へのアプローチ

(付) CD-ROM「問題行動の診断と対応」

子どもの生活の分析から、子どもを支える指針まで網羅。

子どもの世界をよく知る専門家220余名が提言。

さまざまなケースに対応した具体的な事例、指導法を満載。



Vol.1-01 (通巻1号)
定価100円 (本体95円)
送料80円

平成18年4月1日印刷 平成18年4月20日発行 編集人 山岸 忠雄
発行所/開隆堂出版株式会社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1
03 (5684) 6121 [営業], 03 (5684) 6118 [販売], 03 (5684) 6120 [編集] / 振替00130-8-75296
印刷所/パンフィック・ウイステリア 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-31-1 ニュービクトリアビル5F



開隆堂出版株式会社

〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03 (5684) 6111

北海道支社 〒060-0061 札幌市中央区南一条西6丁目11番地 札幌北辰ビル8階
東北支社 〒983-0043 仙台市宮城野区森野町1-11-1 萩野町Mビル2階
名古屋支社 〒464-0802 名古屋市中村区星が丘元町14-4 星ヶ丘プラザビル6階
大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町2-10-16
九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階
☎011-231-0403
☎022-782-8511
☎052-789-1741
☎06-6531-5782
☎092-733-0174